



裸婦
(斧山万次郎作)

斧山万次郎作「裸婦」寄贈される

鹿児島市在住の伊江かね氏が、長年大切に保存して来られた油絵「裸婦」(F 50)が昭和52年10月28日に当館に寄贈された。この作品は故伊江朝康氏が昭和23年頃、福岡県飯塚刑務所長時代に友人の弁護士から譲り受けたものといわれる。作者は福岡県飯塚市在住の斧山万次郎氏(光風会会員)で昭和10年頃に描いたもの。同画伯は黒田清輝に師事、昭和13年沖縄に旅して「守礼門」、「首里風景」など7点の絵を制作したようである。

画歴をみると、昭和17年に光風会会友となり、昭和21年本県出身故名渡山愛順氏とともに会員に推挙されている。

当博物館では中国絵画の流れを汲み、独自の画風を樹立した、いわゆる琉球絵画の古い作品から現代に到るまでの秀作を広く県内外の人々に鑑賞させ、美術活動に寄与することを目標にして展示

をしてきた。今日までこの主旨のもとに多くの方々による絶大なご援助と資料のご寄贈もいただいた。昭和49年に当館主催で開催して好評であった「沖縄近代物故美術家展」終了後に宮平ヤス氏が夫君の故宮平清一氏(新世紀美術協会員)の作品4点を寄贈されたこともある。このたびはまた伊江かね氏が博物館活動に深いご理解を示されて「裸婦」を寄贈していただき非常にありがたいことだと館長はじめ館員一同喜んでいいる。

さっそく、当館では感謝状を贈呈するとともに、第三室(美術工芸展示室)の入口壁面に展示して一般公開している。なお、作品寄贈に到るまでには伊江氏の親戚筋にあたる川平朝申氏には仲介の労を、作品輸送にあたっては久高将吉氏等のご援助をいただいた。ご芳名を記して厚くお礼申しあげたい。

第1回沖縄県博物館協会

職員研修会開かる

12月13日、14日の2日間、加盟館園の代表、市民44名の出席のもとに第1回沖縄県博物館協会職員研修会が当館を会場として開かれた。今回のテーマは「地域社会と博物館等」とし、それぞれの館園が地域社会とどのような結びつきを持っているか、またどのように結びつかなければならないかについて報告し、討議を行なった。報告の題と報告館園はつぎのとおりである。

- 読谷村立歴史民俗資料館の設立構想と現実
- 沖縄こどもの国の行事催し物について
- 観光施設玉泉洞の博物館の性格づけをめぐって
- 竹富蒐集館の設立経緯
- 八重山博物館の入館者分析
- 総合博物館としての沖縄県博の問題点
- 沖縄貝類標本館のめざすもの
- 東南植物楽園の教育的位置づけ



研修会風景

報告と討議に続いて2日目は午後から首里琉染日本民芸館沖縄分館、大嶺薫美術館の見学を行なった。

沖縄県博物館協会は県内の博物館、資料館、美術館、民芸館、動物園、植物園などが、相互の連絡提携、事業の振興、地域社会への寄与を目的として去った7月に結成されたものであるが、今回の研修会はその趣旨を生かすうえで大いに意義深いものであった。

円覚寺の鐘33年ぶりに撞かれる

11月3日の文化の日に、当館蔵の円覚寺楼鐘が33年ぶりに撞かれ、人びとに深い感銘を与えた。この梵鐘は戦前円覚寺の鐘楼にかかっていたが、戦火に会い、戦後の一時フィリピンに持ち去られ、1950年に返還されたものである。円覚寺最後の住職能山宗興氏の話では、この鐘は昭和19年8月まで撞かれたが、戦雲が怪しくなるとともに能山氏は疎開し、爾来現在にいたるまでこの鐘が撞かれることはなかったのである。



撞きはじめの式

ところが、昨年の夏頃、もう1度円覚寺の鐘を聞きたいという声が首里の市民の中からおこり、10月20日には首里文化祭実行委員会が主体となって、博物館構内に鐘楼を設置して梵鐘を掛け、11月3日文化の日に撞かせてもらいたい、という要請を出すにいたった。当館は本庁の了解を得たうえでこれを承諾、10月31日には仮鐘楼が前庭に建った。

当日は首里文化祭実行委員会、那覇市役所首里支所長、首里各町自治会長等関係者多数が集まるなかで鐘が撞かれた。仮鐘楼は今年の2月18日まで存置され、12月31日の大晦日の晩には市民も加わって除夜の鐘が鳴らされた。

現在有志の間で「円覚寺の鐘を聞く会」を結成し、博物館前庭に瓦葺コンクリート製の鐘楼を建てる計画が持ちあがっている。

—特に知念村ジープ洞穴を発掘して—

沖縄島以南の琉球列島からは90ヶ所以上の鹿化石産地が知られている（大城・野原、1977：沖縄県博紀要第3号）。

化石産出状態は2～3の例外を除くと、大部分フィッシャー堆積物であり、次に洞穴堆積物である。特にフィッシャー堆積物は第四紀洪積世中～後期の琉球石灰岩地帯によく発達する。一般に化石の保存状態はよく猪・鼠・ハブなどの脊椎動物化石と混在する場合もある。

化石は造成工事や採石中に発見された例が多いためか産出状態及び層位関係など不明の点があり、今後は事前に調査し発掘する事が急務と考えられる。

現在筆者は新垣義夫氏（県洞穴実態調査員、普天間宮禰直）と共同で、沖縄島南部知念村の洞穴内の鹿化石を発掘中である。この一帯の地質は、中新世末期～洪積世初期のシルト質粘土を主体とした島尻層群と、これを不整合におおう琉球石灰岩から構成され、海拔150メートルの台地地形をなす。さらにこの地域には24～5個の洞穴が発達し親ヶ原洞穴群をつくっている。

化石発掘中の洞穴は、台地の中ほどの不整合付近を南北方向に発達したジープ洞穴で、ここは昔から土地の人々にシカヌフニー洞（鹿の骨洞）としてよく知られていたようだ。洞穴の全長は約90メートルで、内部は数ヶ所で落盤はしているが比較的大規模で、化石は約50メートル奥の洞壁側に堆積し、さらに天井にも付

着している（図中のX印）。堆積物は軟質な赤褐色土壌からなり石灰岩や鐘乳石の細礫を含む。化石包含層は厚さ約50センチで、その上部は約1.5メートルの石灰岩礫を主体とした堆積物だが、石灰岩の二次堆積物で充てんされ固結している。

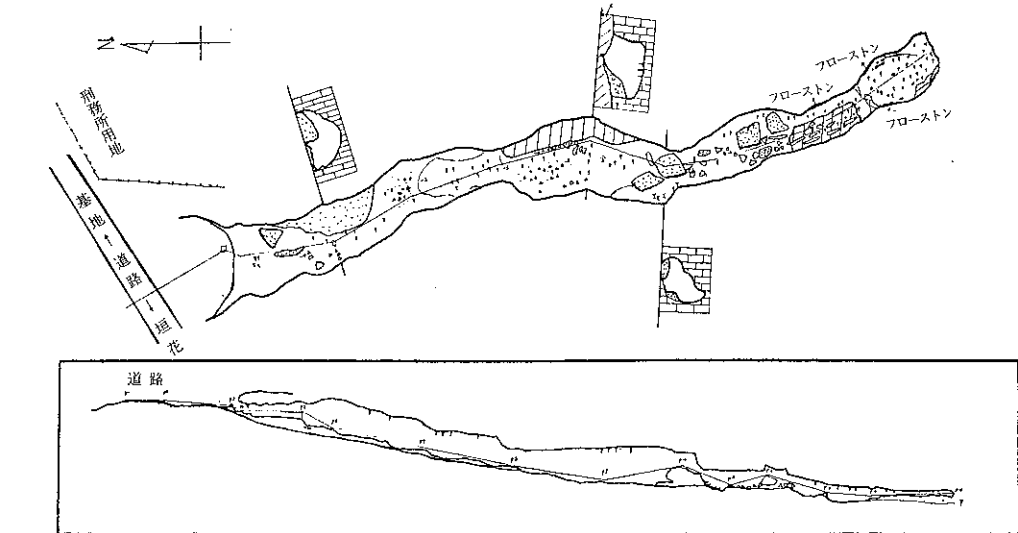
化石は、これまで発掘した歯・角の数から推定しておよそ30頭以上はある。なお、化石骨はよく磨耗しており、堆積物が岩の割れ目から流し込まれたか、あるいは洞口から流れ込んで堆積したかのいずれかとは思うが、現時点では明確にし得ない。しかし、堆積状態から判断する限りこの地点が最終堆積場所であり、洞穴は化石堆積後さらに奥の方へ発達したものと推定される。

この洞内堆積物の鹿化石は、琉球列島の他産地のものに比較して一般に大型であり、さらに角の形態から二種類ほど確認できる。化石は鹿骨に集中しており、堆積物を徹底的に水洗して他にはハブのキバと数個の陸産貝を検出した。

現在、発掘物のクリーニング中だが、昨年発掘された伊江島ゴヘズ洞産と比較して特に大型化石骨が多く、島嶼化による地域差なのか今後比較検討する場合に重要な意味をもつ標本と考えられる。また、大量にまとも出土していることとあわせて、今後早急に種を決定し、復元していく作業を計画している。

（学芸員 おおしろいつろう）

知念村ジープ洞穴の平面図と断面図



（調査・作図、昭50年4.6月 新垣義夫、田場宣忠、下謝名松栄、大城逸朗）

沖縄県立博物館への提言

博物館に「友の会」を

外間政彰

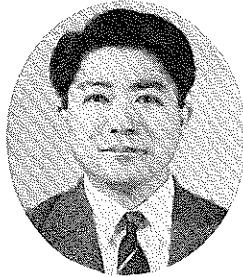
復帰以後の沖縄県立博物館の充実ぶりは目覚ましい。特に昭和49年から始まった月1回の博物館文化講座は、博物館の一般民衆に対する教育機関としての重要な機能を果たしている点で特筆すべき活動である。

わたしは、この博物館文化講座にあつまる好学の人々を基礎に、博物館を己自身と沖縄を知るための教育の場として有効に活用している数多くの文化人や一般民衆を組織して「友の会」を早急につくるべきだと思う。博物館は「友の会」を組織して始めて、その活動が一般民衆の知的日常生活のなかに深く喰い込んでいくのではないかと考えるのである。

友の会は所定の手続をとり、一定の金額の会費を払いこめば、誰でも会員になれる。会員は博物館の諸活動を支援し、博物館は会員に一定のサービスまたは特典を提供する。会員はもちろん博物館への入館は無料であるが、会員に対して提供される最大のサービスは博物館と友の会の両者によって定期刊行される美しくわかりやすい雑誌、による情報のサービスである。八重山や本土などの遠隔の地に住んで、日常博物館を訪れることのできない人でも、会員になれば雑誌を送ってもらい博物館の新しい情報サービスをうけ、自らの研究に役立てることの出来ることはいままでもない。

友の会を組織することにより、博物館の活動対象は、単なる抽象的な「市民」ではなく、その中核体として、具体的な「会員」ということになる。友の会の会員がふえれば、博物館活動がより一層深く広がり、雑誌を媒介として、組織的持続的な知的運動が発展していくことになる。新しい博物館とはこの知的運動の拠点としての新しい機能と責任を明確に認識することがまず必要ではないだろうか。

(那覇市史編集室長)



今を時代の大きな流れの中で —文書資料の保存と展示—

我部政男

博物館は心の故里であり鏡である。

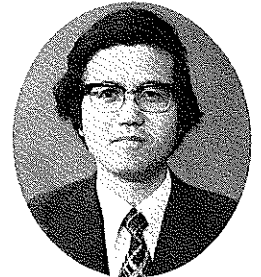
そこには昔の人の懐かしい息吹を感じ取れるのと、今の私たちの生をも、あるものを通じてそこに参加するという強い宿命的な共同性をもって迫ってくるものがある。博物館に対する私たちのあり様

そのものが、実は、私たちの歴史意識をより具体的に規定し、表現しているのであろう。

私たちの博物館は、沖縄の地域を反映して、きわめて独自性と多様性に豊んでいるとは、つとにそこに足を運んだ人の共通した指摘である。例えば、展示物の一つを取り上げてみても、海洋性と南島の風土の中で育まれた地域文化の創造の軌跡を発見することが容易である。ただ、その独自性が、戦後の長期にわたる占領政策によって、意識的に強調された面がある。近代史における沖縄戦に関する展示を欠落させたのもその一つの現われであろうか。沖縄戦が、そこに住む人とその地域の歴史に与えた衝撃の大きかったことは、否定できない。とするならば、沖縄戦を取り上げ、それをいかに表現するかは、今の私たちの課題でありまた博物館の課題でもなかるうか。

私個人の関心に引き付けて、敢えて希望を述べておきたい。それは、文書資料の収集及び調査を精力的に展開していただきたいということである。近世・近代の文書の多くは戦争で散逸した。それでも努力すれば収集は可能である。文書は時代を画し、時代は文書によって、決定される。歴史における大きな転換は、象徴的に公文書の中に記録される。この文書を通じて、時代の潮流を展示してもらいたい。戦後資料の重要文書についても同様である。すでに、典籍の中には、『おもろさうし』のようにその待遇を受けているものもある。おそらく、文書資料には、そのような取り扱いを受けるべきものが多くあるであろう。この作業は、まさに急を要するものである。

(琉大短大部助教授 日本近代史)



新収蔵資料紹介



芭蕉・菊の図



琉球人男女の図



寒山拾得図

芭蕉・菊の図 長嶺宗恭筆 一幅

長嶺宗恭(1852~1932)は雅号を華国、唐名を孟有文という。彼は古波蔵安章に絵を学び大成したが、もっとも得意とした作品に芭蕉の図がある。明治18、19年頃彼が描いた芭蕉に菊花をあしらった絵が宮内省買上げになったともいわれるので、この図も彼が長年描き続けてきたテーマのひとつであったことがうかがえる。

なお、華国の家は首里儀保町の「滝の口」(現在の盛光寺の裏附近)にあったといわれる。

琉球人男女の図 比嘉盛清筆 一幅

比嘉盛清(1868~1939)は雅号を華山といい、那覇市若狭町の出身といわれる。戦前の那覇大綱引は有名であるが、若狭村一番旗「四君子」の旗頭の図案は彼が考案したものという。この作品は明治21年(1888)に描かれたものであるが、する

と彼が若干21歳の時の作品である。寄添うように描かれた男女の図には身分の高い男(士族)と身分の低い平民の女(妾)のロマンスが漂っている。もうこの頃になると華山の非凡なる才能が感じられる。

寒山拾得図 山田真山筆 一幅

山田真山(1885~1977)は13歳で上京し、工手学校入学、同校卒業後東京高等学校図案科に学び、明治39年(1906)に東京美術学校へ入学、そこで彫刻、日本画を研鑽した。明治43年(1910)から2ヶ年間、北京芸徒学堂教師となり、第8回文展に入選、大正12年には明治神宮壁画館に「琉球藩設置」の壁画を描いた。この寒山拾得図は彼が戦前に描いた珍しい作品である。戦後は平和祈念像の制作に没頭するかたわら達磨図などをよく描いた。

(学芸員 宮城篤正)

昭和53年度の当館主催し物一覧

資料寄贈者御芳名(2)

特別展

- 新収蔵品展 6月13日～7月16日
喜如嘉の芭蕉布展 7月25日～8月13日
沖縄の天然記念物の動物写真展
10月3日～10月29日
読谷山花織展(共催)
昭和53年1月23日～2月10日

博物館文化講座

昭和53年

- 4月22日(土) 和紙と芭蕉紙
講師 勝公彦氏(和紙作家)
5月27日(土) 薬草の話
多和田真淳氏(植物研究家)
6月25日(日) 島尻の地質見学
大城逸朗氏(当博物館学芸員)
7月17日(月) 博物館で描こう
喜久村徳男氏(沖縄工業高校教諭)
7月29日(土) 喜如嘉の芭蕉布
平良敏子氏(喜如嘉の芭蕉布保存会長)
8月13日(日) 貝塚の発掘を見よう
知念勇氏(当博物館学芸員)
9月22日(土) 琉装について
真栄平房敬氏(首里中学校教諭)
10月28日(土) 沖縄の天然記念物の動物たち
池原貞雄氏(琉大教授)
11月2日(土) 尚王家の墓「玉陵」見学
名嘉正八郎氏(当博物館副館長)
12月16日(土) 熱帯から亜熱帯の白アリの生活
安部琢哉氏(琉球大学助手)

昭和54年

- 1月27日(土) 読谷山花織の話
渡名喜明氏(当博物館学芸員)
2月24日(土) 琉球の石造建築
又吉真三氏(一級建築士)
3月24日(土) 琉球の帰化植物
宮城康一氏(琉球大学助手)

- 渡久地政輝氏(石川市) 御殿型厨子襷 2点
白井弘和氏(東京都) 江戸上り琉球人名簿 1点
宜保安昌氏(那覇市) 漆喰つき白 1点
知念績三氏(那覇市) 珪化木 1点
伊江かね氏(鹿児島市) 「裸婦」
小橋川永昌氏(那覇市) 湯こぼし 1点、三島手
急須および湯呑 1件10点
新垣栄三郎氏(那覇市) 小皿12点
樺山憲一氏(那覇市) 御殿型厨子襷 1点
平良敏子氏(大宜味村) アサンガニ 1点
桃原用信氏(那覇市) 八重山帆船模型 1点
沖縄財団(東京都) 大嶺政寛作「龍潭池畔」
金城昌太郎氏(那覇市) 渡瓶 1点
識名ヨシ氏(那覇市) 御拝預位牌 1点、ミジク
ブサー 1点、壺型厨子襷 4点、墓標
1点他3点
仲真良英氏(中城村) ウルマンチャー 2点
宮城静子氏(勝連村) アイロン 1点
喜瀬乗時氏(那覇市) ハンマー 1点、シメギ 1
点、ヨコグリ 1点
高宮広衛氏(那覇市) インドネシア産イカツ
ト 1点
城間栄喜氏(那覇市) 紅型型彫用小刀 1点、型
彫用下敷(ルクジュール) 1点
滝沢荘二氏(東京都) 沖縄県管内全図 1点
大原英男氏、大久保英夫氏(北海道)
アンモナイト 2点
大森昌衛氏(東京都) ベレムナイト 2点
新城加那氏(宜野湾市) 沖縄県全図 1点
新納武二氏(鹿児島県) カサリグイ 1点

沖縄県立博物館だより No.4

発行年月日 昭和53年3月31日

編集・発行 沖縄県立博物館

住所 〒903 那覇市首里大中町1の1

TEL. 0988-32-2243